

ベルリン 3 日目-1

ポツダム—赤い星が咲く「化け物」が生まれた宮殿—

日本の戦後が決まった場所をみてみたい

翌日は先生がどうしても行きたいといったポツダム。

先生が東ドイツにきたとき、ポツダムは簡単に行き来できる場所ではなかった。

ポツダム会談の場所となった宮殿の近くには国境線があり、周囲にはソ連の施設が並んでいたと聞く²。近寄ることすら難しかっただろう。

しかし、いまやポツダムはベルリンのベットタウン。

ベルリン中心部から S-bahn（近郊鉄道）によって 40 分ほどでアクセスできる。



ポツダム駅

そして、気が付くと、「こねこ」がもうひとり増えている。



saita (c)

この日から合流した M くん

² 後日別の友人とポツダム観光ツアーに参加した際のツアーガイドの説明から。昔はソ連軍の駐留地域でいまは高級住宅街という場所を通り、そこを抜けて宮殿に至った。

はっきりいおう。この街は非常に観光がしにくいところだ。

ポツダムの街をなるべく徒歩で回ろうとすると、大きな観光地、サンスーシ公園かツェツィーリエンホーフ宮殿のうち1つを捨てなければならない。言い訳に聞こえるかもしれないが、これまでポツダムを数回訪れている私も、ツェツィーリエンホーフ宮殿にこのときまで足を延ばしたことがなかった。見どころが拡散しているのだ。

この街の観光すべき場所は、私の独断では5カ所。

ひとつめは駅からずっと市電沿いにいき、川を渡ってすぐのところにある映画博物館。ポツダムはかつて映画がつくられていた場所で、有名な映画俳優も多く住んでいた。

2つ目はその右横にあるニコライ教会。この付近は戦争で崩壊し、東西統一まで周囲にがれきがいつまでも残っていた。さらに北上すると3つ目のオランダ人街がある。その名の通り、オランダ人が入植した地区で、オランダ風の建物が並ぶ。おしゃれなカフェやお店が並び、この街の繁華街といってもいいだろう。

問題はその先のコースである。

左にいくとフリードリッヒ大王が建設した夏の離宮跡、サンスーシ公園。

さらに北上するとポツダム会談が開かれたツェツィーリエンホーフ宮殿となる。

どちらも見逃しがたい名所であるが、どうしてもツェツィーリエンホーフ宮殿よりもサンスーシ公園に向かってしまう。なぜならツェツィーリエンホーフ宮殿は山の上にあるバスを使わないと行きづらい。徒歩での街探索を好めば、平坦な道が続くサンスーシに足が向いてしまうのも仕方ない。

だが、サンスーシの観光も覚悟してかからなければいけない。3平方キロメートルある公園内にはロココ様式・バロック様式の多くの宮殿が点在している。一番奥の新宮殿まで行くと疲れがピークに達し、そのまま南下して2駅先のパーク・サンスーシ駅からバスか電車でポツダム中央駅に戻ってしまうのだ。中央駅側から一番近いフリードリッヒ大王が眠るサンスーシ宮殿だけに見学を留めても、そこに上り詰めるまでの階段が相当あり、上までいくと大体一息つきたくなる。サンスーシとはフランス語で「憂いなし」というのだが、この公園は観光するには憂鬱になるほどの広さがあるのだ。

ツェツィーリエンホーフ宮殿には、オランダ人街の近くまで路面電車で、そのあとバスにのりついで急な坂を上り、しばらく林の中を歩くとあらわれる。



saita(c)

最初、私たちは入り口がわからず、中庭のほうを回ってしまった。



saita(c)

ここの入場料にはオーディオガイドが含まれている。私たちは、ヘッドフォンから流れてくる説明を各々聞きながら、この宮殿の由来や、ポツダム会談について知ることになる。

そのガイドの説明によると、3国代表は、私たちが通った中庭で2週間余りに及んだ会談の合間、お茶をしていたという。

それを聞いて思った。

ポツダム会談は日本の戦後が決められた場と歴史で習ったが
3国代表にとって日本なんて正直どうでもよかったのではないか？



saita (c)

3か国の代表がこの会議場に集まった。

相互の接触を避けるように、3か国がそれぞれ別の入り口から会議場に入れるようになっていた。

宮殿はとても優雅な場所であった。

皇太子とその妃チェーチーリエのためにウィルヘルム2世が建てたイギリス風の城。

ドイツとの戦争がおわってほっとした各国首脳が、これからのことを落ち着いて話し合うにふさわしい、緑と湖に囲まれた地にある。

ふと世界史の意地悪な問題を思い出した。

ヤルタ会談、ポツダム会談、その両方の会談に「ずっと」出席していたのは誰か？

答えはソ連のスターリン。「ずっと」というのがポイントである。

ヤルタ会談の出席者はルーズベルト、チャーチル、スターリン。しかしルーズベルトはドイツ敗戦の直前に急死、ポツダム会談にはその地位を引き継いだ元副大統領のトルーマンが出席した。イギリスのチャーチルは会議中に失脚し、途中でアトレーに交代する。

つまり、戦後処理を決める重要な2つの会議に「ずっと」存在したのはスターリンだけなのだ。

だがこの中庭に立つと、受験で学んだのとは別の会議の姿が想像できる。

首脳3人は会議中どんな気持ちだったのだろうか？

選挙の行方に気もそぞろのチャーチル。

円卓を運び込み、「対等」を強調しつつも自らの占領地内で会議を開催する鼻息の荒いスターリン。

ルーズベルトから予想もせず引き継ぎ先代を意識しつつも巨頭2人には及ばない新参者のトルーマン。

結果、この会議はスターリンの思惑が如実に表れる結果となる。

つまり、戦後体制でソ連が強大な力をもつようになったターニングポイントになったはずだ。

そして、その流れの上に、ソ連は日本に侵攻し、広島と長崎に核爆弾が散った。

ヤルタ会談はドイツの戦後処理が話し合われ、ポツダムは日本の戦後処理が決まったと習ったが、この2つの会談はそんな言葉でいいあわせるようなものではない。

イギリス、アメリカのトップがさまざまな事情で変更する中、戦後処理の方向性が歪み始め、ソ連が勢力を強めた「冷戦」のきっかけだ。

その潮目の大変化の狭間で、日本の戦火が拡大することになったのだ。

「1945年、日本はポツダム宣言を受託した」

だれもが世界史で習うこの「受託」という言葉、

「おまけ」で決められたことに対して、なにかうやうやしい言葉をつかって歴史を語り継ぐ、日本のせめてものプライドが込められているのかもしれない。

だが、日本はこのような世界情勢の大転換の流れをかぎとれなかったのだろうか？

かぎつけられたらもっと他に打つ手があったのではないか？

空爆、核爆弾で多くの人々が戦争の犠牲になることもなかったのではないか？

私たちが学んできたポツダム会談は、いったい誰の目からみた「歴史」なのだろうか？

立花先生はポツダムの見学中、「スターリンという化け物」という表現を何度か口に
した。

確かにここは「化け物」が生まれた場所なのだ。

鉄のカーテンが開くまで、自由な往来を拒んだ

45年つづいた「冷戦」という「化け物」が。



sano (c)

中庭には会談を記念し、赤い花がソ連の星形に植えられている。ちょうど訪問した時期に咲いていた。